

小特集 トランスパシフィック ——批判主義的地域研究の試行的／思考的視座として——

Transpacific as Perspectival Turn in Critical Area Studies

李 孝徳
LEE HYODOK

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

原稿受理日：2021.2.12.
Quadrante, No.23 (2021), pp.7-8.

前言

科研プロジェクト「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティック」(研究課題／領域番号：15H01851 代表：東京外国語大学教授・小川英文)は、東西冷戦構造の終結以後、一気に進んだグローバリゼーションのもと、国際関係、国民国家、地域の伝統、国史といった従来の学問的な枠組みに依拠しえなくなった諸地域に対する研究をどのように捉え直すのかという問題意識から諸地域の地域研究者たちが集って企画され、進められたものである。これまで東アジア(2015年)、アフリカ(2016年)、中央アジア(2016年)、南アジア(2017年)、オセアニア(2018年)、東南アジア(2020年)の諸地域において、こうした問題意識から現況の地域研究を批判的に検証し、今後の在り方を模索する作業を国際シンポジウムの開催を通して行ってきた。研究プロジェクトの最終年度にあたり、本研究プロジェクトに関わる研究者たちの足場である「日本」を対象化した検証を試みることになり、開催されたのが2020年8月に行われた国際シンポジウム「日米帝国の総力戦・マイノリティ動員・レイシズムを相比する」である。

シンポジウムで議論されたのは、Takashi

Fujitani, *Race for Empire*, University of California Press, 2011 である。本書によれば、アジア太平洋戦争が総力戦と化すにつれ、日米双方の帝国において朝鮮人および日系人というそれまで徹底的に周縁化されていたコロニアル／エスニックなマイノリティが兵力として動員されていく過程で、従来の排除的なレイシズムは包摂的なレイシズムへと変化し、下品で(vulgar)暴力的なレイシズムは表向き人間性に配慮した上品な(polite)レイシズムへとその様態を変えることになったという。日本と米国というその成立も発展過程もまるで異なる二つの帝国国家がアジアにおける覇権争いに鎬を削るなか、互いが互いの社会を人種差別的であると非難し合いながら、双方の国家が共振(resonance)、マイノリティに対する排除と包摂の様態に奇妙な相似化(convergence)が起こり、しかも日本の敗戦後、東西冷戦下の日米関係は、戦後の米国における“モデル・マイノリティ”という日系アメリカ人の包摂の形態をそのまま反映する形になってしまったというのである。戦時期の映画や小説はこれらの帝国主義イデオロギーを反映しつつ、強化する反面、逸脱していることも本書では緻密に分析されている。果たしてこうした共振や相似



化はどのようにとらえられるべきなのか。こうした二帝国の共振や相似化の分析は現代世界になお影響を与え続けている帝国主義／植民地主義を批判的に再分節するために何を提供するのだろうか。本シンポジウムでは、*Race for Empire* の日本語版『共振する帝国——日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士』（仮題）が2021年刊行予定ということで、多領域の研究者たちが集い、こうした共振と相似化の検証を通じて、トランスパシフィックという視座から日本と米国をめぐる帝国主義研究／植民地主義研究を批判的に豊饒化することを目指すべく開催された。

なお、本シンポジウムは本来2020年3月に開催予定だったのだが、コロナウィルス感染症の拡大に伴い、いったん中止を余儀なくされた。しかし、幸いなことに関係者の尽力で同年8月にオンラインによる開催にかたちを変えて実施されることとなった。今回その記録を《小特集》として本誌に掲載することになった次第である。オンライン上の国際シンポジウムということで時間も限られていたため、シンポジウム後にメールで行われた議論も補足的に掲載した。本シンポジウムで論じられた *Race For Empire* の著者であるタカシ・フジタニ氏の「シンポジウムを終えて」と司会者であった水谷智氏の「シンポジウムを振り返って」がそれである。シンポジウムの趣旨を理解するための格好のテキストになっていることがお判りいただけると思う。

また、シンポジウムの記録とともに、米山リサ「トランスパシフィックの脱植民地的系譜に向けて」^{ディコロニアル・ジニオロジー}を併せて小特集に掲載することとなった。米山リサ氏は本研究プロジェクトの支援者にして『共振する帝国——日系人米軍兵士と朝鮮人皇軍兵士』の翻訳者の一人であるが、本論考はそれらとは関係なく書かれたものでありながら、はからずも本プロジェクト並びに本シ

ンポジウムの問題意識と展望を見事に理論化してみせており、それらの理解に大きく資するものとなっていると思われたからである。冷戦終結以後に露呈し、あらためて問われることになった20世紀という「過去」は、第二次世界大戦後の「アメリカの世紀」を招来した貫太平洋における日米の帝国戦争と、欧米では「終結」とされながら東アジアでは今なお続く冷戦とを抜きにしては対象化できないはずであるにもかかわらず、今なお大西洋史観的な観点から語られ続けている。本論考はこうした大西洋史観を越えて、これからの地域研究が意味を持つための問題の所在を見事に剔抉して見せていることがお判りいただけることと思う。翻訳の掲載を快諾いただいた米山リサ氏には心から感謝をしたい。